

# であい



公益社団法人  
北海道国際交流・協力総合センター  
HIECC/ハイエック  
(旧 社団法人北方圏センター)  
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

昨年度より、北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)では北海道教育大学の津教授(日本国際理解教育学会会長)による監修及び指導、また開発教育の実践者である開発教育ファシリテーターのご協力のもと、道内の高校生を対象に開発途上国へのスタディツアーを含む人材育成事業を実施している。今年度は10名の高校生が8月にベトナムへ行き、南部のホーチミン市と中部のフエ市を訪ねた。ツアー期間中は現地でも活動するNGOが支援する子どもたちと交流し、国際協力活動の一端を体験することができた。

## 事前研修を重ねて

この事業は現地に向かう2カ月前の6月の事前研修からスタートする。道内に304ある全ての高校に募集案内を出し、札幌及び近郊の学校に通う高校生や遠くは鹿追からの応募者が面接を経て参加した。違う学校に通う高校生たちとあって最初の研修では遠慮し合う空気が漂っていたが、この事業は高校生が主体的にツアー内容を作り上げていくことも特徴の一つ。現地で訪問するNGOの選定から訪問に係る日程調整、現地の子どもたちとどんな交流をするか等を考える。全員が何をしたいかを考え、時には意見をぶつけあひながら「10人」のプログラムを作り上げていく。このプロセスを通し2回目の研修のときには、すでに「仲間」という意識が芽生え、8月には気持ちを一つにベトナムへと出発した。



子どもとの交流

## 生まれた一体感

ツアー日程は8月8日～15日。このわずか一週間で高校生たちは様々な経験をしてきた。

まず、主に2つの国際協力活動を体験した。一つは車いすをベトナムに届ける活動。これは、NPO法人「飛んだけ!車いす」の会のご協力を得て実現した。日本で使われなくなった



心をこめて、車いすを整備して

車いすを現地のニーズに合わせて整備をし、それを旅行者が運ぶというものだが、今回、高校生は整備の段階から携わり、自らの手で6台の車いすをベトナムに運ぶことができた。

また、ベトナム戦争でアメリカ軍が散布した枯葉剤の影響でほとんどが枯れてしまったマングローブ林における植樹体験も行った。次に、この事業のメインである子どもの支援をしているNGOの訪問。当日、準備した交流内容を進めていこうとするが、目の前にはベトナムの子どもたちが「何が始まるのだろうか?」と見ている。高校生が緊張しながら何度も練習をしたあいさつや交流プログラムを始めると、言葉の壁を超え次第に子どもたちと心が通い合い、かけこをしたり、一緒に踊ったりしながら一体感が生まれ、訪問が終わる頃には、「会えてよかった」、「まだ帰りたくない」という気持ちになっていった。

## 体験を伝えていくこと

ツアー中は毎日全員で「振り返り」を行った。活動が終わった後にホテルの部屋または、移動の空港ロビー等でもその日にした活動



その日の「振り返り」

の反省や良かったこと、またその中で抱いた疑問や思いなどを率直に話し合う時間をもった。最初は思っていることを言葉にすること自体が難しかったようだが、津教授や開発教育ファシリテーターの指導のもと、高校生はその時その時の思いを自らの言葉で伝えることができるようになった。互いの思いを伝え合うことで、さらに仲間として信頼できるようになっていった。

これらの活動を通して、ベトナムに行ったということにとどまらず、各々が内面的な成長を実感した8日間となった。

今後、高校生たちは卒業した中学校や在籍する高校で、ベトナムで体験し悩み考えたことを報告会という形で伝えていく。次号では、その報告会における高校生の活躍の様子を特集する。

## 特集

### HIECC事業

### 高校生が見たベトナム

## 開発教育ファシリテーターと参加する国際協カツアー

### 報告 I

## さっぽろ 留学生日記

将来は日本の企業で仕事をしたい

グエン ミン フォンさん  
ハノイ大学4年生  
北海道教育大学留学生



### 日本語学科で勉強中です。

ベトナム社会主義共和国のハノイ大学から交換留学で北海道に来た。帰国後は4年生に戻って勉強を続ける。

「中学生の時に見たテレビ番組「日本のお菓子づくり」が日本との最初のであいでした」というフォンさん。「これからコンピューターの勉強もしたいです」。そして将来は日本の企業に勤めたいと希望している。高い技術を持った国、景色が美しい国が、日本についてのイメージだったそう。

### ベトナム国内も旅行したい

来日して、抱いていた日本に対するイメージと実際はそう違わなかったそうだが、北海道は日本の他の所とはちょっと違うと感

じた様子。北海道内では、函館に行っていないのが残念だそう。母国でもまだあまり旅行をしていない。「南のホーチミン市までは飛行機で3時間かかりますし、まだ行ったことはありません」。将来、社会人になった時には様々な所に出かけて見聞を広めるに違いない。静かな人だが、前向きで、好奇心の持ち主という印象だった。

### 札幌のホテルでアルバイトも

日本の学生のように、勉強の合間に札幌のホテルのレストランでホールスタッフとしてアルバイトも経験した。「列車が時間通りに動いているので帰るのが遅くなくても大丈夫でした」と住んでいるあいの里から通勤?した。札幌で暮らして、日常生活の時間がきっちりしているのが印象的だったと感心していた。1週間のホームステイも体験し、その家族と仲良しになって楽しい日々を過ごした。

ひと冬を過ごし、「雪が多くて驚きました。初めて見ました。きれいでした」。1年間の楽しい留学生活を送って夏に帰国された。



おこしやす  
-京都 清水店-

11月5日(土)午前10時から、函館市青少年センター(同市千代台町27番5号)を会場に海外との交流や親善を目的に活動している20を超す団体、グループなどが集い、賑やかに開催された。午前中、函館日本語教育研究会(JTS)主催による「日本語スピーチ発表会」では、日本語を勉強しているアメリカ、ニュージーランド、中国、イタリアからの留学生などが日々の体験から思うことを発表した。続く交流企画ではグループに分かれて普段話さず機会がない外国人と市民の話し合いももたれた。

体育館では国際交流団体の活動紹介のパネルが展示され、世界の雑貨や食品などの販売が行われ終日賑わっていた。お昼にはタイ、フィリピン、韓国の料理が販売されて家族連れや若者たちが珍しい料理を味わい、外国を堪能していた。

早くから海外との行き来が始まった土地柄だけに展示からも諸外国に目を向けて活動する団体の姿がうかがわれた。

(主催・財団法人北海道国際交流センターなどによる地球まつり実行委員会)



世界の文化が  
函館に集結!  
開催

## 「第7回地球まつり」

## LIBRARY INFORMATION

JICA札幌図書室

国際協力、開発途上国に関する図書を中心に、和書、洋書、併せて約10,000点の資料を所蔵しております。自由に閲覧できますので、一般の方もどうぞお気軽にご利用ください。

北海道における国際協力に関する情報の提供を目的とし、1996年、JICA札幌に図書室が開設されました。「JICAについて知りたい」、「開発途上国について知りたい」、「国際協力について調べたい」という皆様に応えられるよう、たくさんの図書、映像資料を取り揃えております。また、図書室内で当室所蔵のビデオ、DVDの視聴が可能です。所蔵資料に関するご質問など、どうぞお気軽にお問い合わせください。



JICA札幌図書室

JICAの事業紹介ビデオ、教育分野の図書など、一部の資料の貸出を行っています。

貸出対象者: 18歳以上の方  
(運転免許証等の身分証明書を必ずご持参ください)

貸出期間、冊数: 1週間、2点まで  
なお、貸出対象ビデオ、図書、毎月の新着図書資料の一覧表をJICA札幌ホームページにて公開しております。

〒003-0026 札幌市白石区本通16丁目南4番25号  
TEL: 011-866-8306 FAX: 011-866-8302  
E-mail: jicasic-lib@jica.go.jp  
OPEN: 月~金 9:30~19:00 土 9:30~16:30  
CLOSE: 日曜、祝日、年末年始

新着図書資料です

『軍服のモスクー -モノから見える世界の現実』

著者名: スウィフト, リチャード  
出版社: 合同出版 / 出版年: 2011年

夏になると私たちの睡眠を脅かす蚊。種によってはバクテリアやウイルスをはじめとした多くの病原体を運び、死に至る感染症を媒介します。蚊はどのような生き物か。蚊から身を守る方法は。そして、蚊を通して見える世界とは、地球とは。

公益社団法人  
北海道国際交流・協力総合センター  
HIECC/ハイエック  
(旧 社団法人北方圏センター)

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館  
発行日: 2011年12月7日  
TEL.011(221)7840 FAX.011(221)7845 http://www.hiecc.or.jp  
E-mail: pbl@hiecc.or.jp (調査研究部) intc@hiecc.or.jp (国際協力部)  
印刷: 岩橋印刷株式会社



## “手から手へ”

～北海道から想いをつなぐ2,000台の車いす～

認定NPO法人「飛んでけ!車いす」の会  
学生ボランティア 大沢 風子さん

いま、世界中の発展途上国では、枯れ葉剤や地雷の被害を受けて障がいを持った人々がたくさんいます。このような人々は、国からの援助を受けることもできず、日々暮らしていくことすら困難な場合も少なくない一方で、日本ではサイズが合わなくなって使われなくなった車いすや、医療器具などがあまりリサイクルされていません。

### 車いすの再利用×顔の見える国際交流

そうした世界の状況から「飛んでけ!車いす」の会では、日本で使われなくなった車いすを集め修理をして、海外へ行く旅行者の手荷物として、ベトナム、タイなど東南アジアから、アフリカや中南米まで74カ国の病院や施設に送り届ける活動を行っています。実際に車いすを運んでくださっている方の中には、ボランティア

に参加される学生や観光目的のご夫婦がいたり、また出張でのトランジットを利用して運んでくださる方がいたり様々です。私たちは、国境を越えて多くの障がいを持つ人たちの力になり、そして手から手へ、直接車いすを送るという活動を通じて人と人がつながり、顔の見える国際交流を行うことを目標に活動しています。

当会は1998年に任意団体として活動を始めてから今年で14年目となりました。今年の8月には2,000台目



2,000台目を運んだ高校生たち(ホーチミン市)

の車いすが「公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター」さん主催のスタディツアーに参加した高校生たちの手からベトナムの障がい者へと手渡されました。

### 伝える活動×ボランティア

国内では、専門家や外国人を招いた講演会や学習会などを主催しているほか、小・中学校を訪問し車いすに実際に触ってもらったり乗ってもらったりすることで、モノの大切さやバリアフリーについて考えるきっかけ作りを行っています。これらの企画・運営は学生からシニアまで、幅広い年齢層のボランティアが主体となっています。



タイ・バンコクのチャヤパちゃん「行きたいところに行ける!」

また、車いすを送っている国を訪問して実際に車いすを運ぶこと、また、過去に贈った車いすの様子や、現地の施設・病院などの様子も見学し、現地の方々との交流を行うスタディツアーも定期的に開催しています。

旅行のついでに海外に車いすを運びたい、車いすを整備したい、事務局でボランティアをしたい、会員になりたいなどという方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡ください。

### 認定NPO法人「飛んでけ!車いす」の会

〒064-0808  
札幌市中央区南8条西2丁目 市民活動プラザ星園407  
TEL&FAX: 011-206-7775  
E-mail: tondeke@bz01.plala.or.jp  
URL: http://tondeke.org/ ブログ: http://tondeke.org/blog/

8月23日に  
新事務所へ  
引っ越しました!

## 平成23年度 「地域国際化ステップアップ・ワークショップ」札幌、函館 —地域活性化に国際交流/多文化共生を— 田村太郎氏が基調講演

昨年度3回開催した多文化共生ワークショップの成果を受けて開催した(10月21日 於・北海道立道民活動センター かでる2・7)。



田村太郎氏

**講演** NPO法人多文化共生センター大阪・代表理事の田村太郎氏が改めて、「少子高齢化で2050年には20歳代の人口は全体の1/3になります。労働人口の減少は日本だけではなく今まで働き手の送り出し国であったアジア諸国も同様です。世界的に働き手の獲得競争が進む中で、外国人に住んでもらえる社会づくりが地域の未来を左右します。また、観光客に長く居てもらうにはどうすれば良いかも考えよう」と、国際社会における今後の北海道の可能性について話した。

**事例発表** 後半は「これからの北海道の地域活性化を考える」をテーマに、東日本大震災で外国人観光客が減少したことを受け、「北海道における国際観光」について滝川市と倶知安・ニセコエリアの、また「災害に強いまちづくり」という観点から防災や地域コミュニティの大切さについて民間のボランティア活動の例が発表された。

滝川市の前田康吉市長は、農業分野でこの15年間に70名の外国人研修員を受け入れてきた実績から「これまで気づけなかった地域の魅力を国際的な視点で最大限に利用したい」と地元の特性を生かした国際交流を進めたいと説明された。続いて、季節を問わず豪州からの観光客が長



講演する滝川市の前田康吉市長



講演を聴く参加者(札幌会場)

期滞在するようになったニセコエリアの成功例を(株)ニセコアドベンチャーセンター代表取締役のロス・フィンドレー氏が「最初の来訪者たちの口コミで人気に火がついた。時差がなく旅行が楽な日本で休暇をと願う観光客が増加(1月～2月で3,000人)した。さらに地元は外国人が喜ぶインフラ整備に努め、これは逆に地元町民にも喜ばれている」と、魅力的な観光地とは何かを語った。続いてNPO法人さっぽろ自由学校「遊」理事の小泉雅弘氏が東日本大震災の避難者支援をする立場から「多文化共生を凝縮したような経験をしている。避難してきた人々は、異なる文化、異なる価値観を背負って北海道に避難して来ている」と、支援活動を通じて日本人同士であっても多文化を認める必要を感じた経験を発表した。

その後、参加者全員がグループに分かれてその日の内容の共有や意見交換を行って終了した。**函館会場** 翌22日は、「東日本大震災から多文化共生を考える」と題し(財)北海道国際交流センター(hif)との共催でワークショップを行った。田村氏が阪神大震災から今まで携わってきた活動やその経験を通じ、災害時に備えて今からできること等を話した。講演後の具体的な質疑からも、参加者にとって今後の新たな活動に繋がる内容となった。



ワークショップの様子(函館会場)

(財)自治体国際化協会、(公社)北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)、(財)北海道国際交流センター(hif)の共催。

## 厚岸町と豪・クラレンス市～ひとつの史実から始まった姉妹都市の縁組み

### クラレンス市(オーストラリア・タスマニア州)と姉妹提携 —来年で30周年—



交流写真展(クラレンス市)。熱心に見つめる地元の女性

1982(昭和57)年2月、道東の厚岸町はオーストラリア・タスマニア州のクラレンス市と姉妹自治縁組みを宣言し、両自治体は高校生の親善訪問や交換留学、市民の訪問等の交流事業を続けてきました。

日本とオーストラリアの国交上の節目の年に当たった2006年、写真を通じて双方のまちや生活・文化などの理解を深めることを目的に「厚岸・クラレンス交流写真展」を開催し、クラレンス市側は写真30点、パネル12点を、厚岸町側は写真56点、パネル6点が交互に両地で紹介されました。また、厚岸町の国際交流グループ「アイリス」が行うホームステイを通じて市民同士の友好交流を深めあってきました。



交流写真展(厚岸町)に見入る子どもたち

オーストラリア大使館からの資料照会、本国からのメディアの取材等を経て、厚岸町議会は姉妹都市縁組みを議決しました。調印の前年、1981年には、遠藤雅子さん著、「謎の異国船」が出版され厚岸沖遭難事故での乗組員救助の史実が広く紹介されました。

### 厚岸潮見高等学校、厚岸水産高等学校と ローズベイ・ハイスクール



サケ缶詰づくりを体験する

また両市に共通する産業である水産業、特に牡蠣の養殖については、交流がきっかけで日本で初めてとなる「シングルシード方式」による牡蠣種苗の生産を厚岸町が開始するなど、大きな成果をあげています。2008(平成20)年来町したクラレンスのローズベイ高校

の生徒は地元の厚岸水産高校(現在は厚岸潮見高等学校とともに新設統合されて厚岸翔洋高等学校)で缶詰製造を体験しました。

今年3月に起きた東日本大震災で厚岸町は、養殖施設などに被害を受け、今、復旧、復興の途上にあります。姉妹都市交流が親善交流にとどまらず、双方の産業に対する理解を深める機会になることを願いつつ、来年は姉妹交流30周年を迎えます。

**厚岸町**  
〒088-1192 厚岸郡厚岸町真栄3丁目1番地 まちづくり推進課  
TEL: 0153-52-3131 FAX: 0153-52-3138  
E-mail: akkeshi@pop2.marimo.or.jp  
厚岸町ホームページ http://www.akkeshi-town.jp/

**嘉永3年(1850年)、捕鯨船イーモント号**  
この市民交流は、江戸時代の嘉永3(1850)年にオーストラリア・タスマニア州ホバート港を母港とするイーモント号という名の捕鯨船が厚岸の沖合で遭難し、その際に地元民が乗組員32名を救助したという史実がきっかけでした。

## 「2011世界の見聞広場」開催(札幌)



地域の人々がJICA研修員との交流を深める場となる「世界の見聞広場」が今年も、8月27日(土)の午後、JICA札幌トリフレサポロを会場に開かれた。例年、世界の民族衣装や楽器の展示、研修員のパフォーマンスなどが披露されるいろいろな国を知ることの良い機会になっている。

12時半に開場、夕方4時半の「研修員と踊ろう!」のフィナーレまで、JICA研修員が自国の歌や踊りなどのパフォーマンスを競う「研修員アトラクション・コンテスト」、「世界の文字」、「世界のお茶体験」や「書道体験」のコーナーなど盛りだくさんのプログラムを、訪れた市民、親子連れなどが楽しんだ。

主催:独立行政法人 国際協力機構札幌国際センター  
協賛:公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター、財団法人札幌市職員福利厚生会 他

## 2011 ワールド人間ばん馬チャンピオンシップ「世界大会」への挑戦(帯広)



帯広国際センターの研修員14名(選手6名+応援8名)が、10月16日(日)、帯広競馬場で開催された「人間ばん馬レース」に参加した。このレースは、5回目を迎えた「とかちばん馬まつり」のメイン事業として実施されたもので、馬を人間に置き換え、十勝内外から参加した25チームそれぞれが150kgのソリを引いてゴールを目指した。

研修員6名で結成されたチームの名前は「ジャイカフォレストーズ」。想像以上に重いソリに苦戦し、残念ながら制限時間である4分以内にゴールすることはできなかったが、応援者も含め、大いに盛り上がり、楽しんでいた。

主催者:ばん馬と共に地域振興をはかる会